

ステークホルダー・ダイアログ 第二回

『環境・社会報告書2010』を読む

新日鉄は昨年、第1回のステークホルダー・ダイアログを開催しました。
環境と生活・経済と社会を関連づけて積極的に活動されている有識者の皆様に
当社の環境と社会に対する取組みをご説明した後に
『環境・社会報告書2009』をご覧いただき、
それぞれの視点から忌憚のないご意見をいただきました。
そうしたご意見を参考に制作した今回の2010年版ですが、
あらためて昨年と同じ皆様にお集まりいただき、
今年度版の報告内容や当社の取組みに対して今後の改善点についてお訊きました。
[2010年8月20日 新日鉄本社(東京都千代田区)にて開催]



国際海洋研究所 (IOI)
日本支部 事務局長
大塚 万紗子氏

桂川・相模川流域協議会
代表幹事 環境カウンセラー
河西 悦子氏

東京財団
研究員兼政策プロデューサー
吉原 祥子氏

司会
持続可能な発展のための
日本評議会 (JCSD) 事務局長
黒坂 三和子氏

新日本製鐵
参与・環境部長
山田 健司

新日本製鐵 環境部
環境リレーションズ
グループリーダー
能勢 大伸

新日本製鐵 環境部
環境リレーションズグループ
マネージャー
篠上 雄彦

新日本製鐵 環境部
環境リレーションズグループ
北澤 朝子

新日鉄が「鉄を語る」という、 新しいチャレンジが奏功

黒坂 まず、見開きから始まる2010年版『環境・社会報告書』の総論的なご意見ををお願いします。

河西 昨年のダイアログで出た、「鉄自体や鉄鋼業についても伝えるべきではないか」という意見がよく反映されていて、特に特集ページを読めば鉄という素材の一般的な捉え方が大分変わってくるのではな

いかと思います。スケール1の「人体・いのち」からスケール6の「宇宙」へと視野を広げていく見せ方も新鮮でした。

大塚 人やいのちを意識したことで従来の堅いイメージがかなり柔らかくなって、鉄という素材や新日鉄という企業をもっと身近に感じてもらえるのではないのでしょうか。

吉原 昨年版の「新日鉄が新日鉄を語る」というスタイルから、「新日鉄が鉄を語る」というスタイルに変

わっていて、これを読むことで新日鉄だけでなく鉄そのものについての理解を深められるような内容になっている点が素晴らしいと思いました。文章も平易でわかりやすく、読み手に伝えようという姿勢があって、前半が楽しく読めることで、後半の難しい、細かい説明も読んでみようかという気にさせるのではないかと思います。

黒坂 前半は特集部分、後半は基本情報として毎年積み重なっていく所ですね。

大塚 社会性報告のページは読み易かったし、新日鉄という会社の理解を深めるのに役立ちました。このパートでは内容の順番も変わりましたね。

篠上 去年のダイアログで「株主・投資家の皆様とともに」が最初にあるが、一般の生活者中心に考えても良いのではないか」とのご意見があって我々も考え、「地域社会」に始まって、次に「お客様・調達先の皆様とともに」が続く並び順に変えました。確かに株主・投資家の方々向けにはアニュアルレポートなどのツールがありますし、環境・社会報告書はより生活者中心の構成に改めました。

黒坂 今年版『環境・社会報告書2010』の構成と描き方に、去年の皆様の提案が反映されていると感動されたようですが、「トップステートメント」に関してはいかがですか。

大塚 そうですね。「トップステートメント」はページ数を減らしたことで内容がコンパクトにまとまり、すっきり読めて良かったと思います。宗岡社長の写

真も製鉄会社らしさが出ていて好感が持てました。

河西 ステートメントの中で「^{ふるさと}郷土の森づくり」に触れているのも、今回の報告書とリンクする形で読めて良かったと感じます。

吉原 私は今回の報告書の中で唯一、残念に感じたのがこの「トップステートメント」でした。巻頭や、特集ページが格段に変わったのに、「トップステートメント」が昨年版とあまり変化がなかったように思います。企業のトップには、持続可能な社会に向けての取組みの、会社としての基本姿勢などの「そもそも論」や、もっと大きなビジョンを語っていただきたいと思っています。

大塚 確かに、基本的な語り口は昨年版と同じでしたね。

吉原 巻頭ページの文章に「私たちは、鉄づくりとリサイクルというふたつの側面から地球温暖化対策を推進し、「循環型社会」を実現する、新しい社会システムの結節点の役割を果たしていきたいと考えています。」という一文がありますが、たとえば、まさにこれが新日鉄の考えるビジョンではないでしょうか。今回の報告書を買っているコンセプトだとも思うので、トップステートメントではこういうことを語ってほしいと感じました。

黒坂 そうしたビジョンが、社長の肉声として伝わってくると良いですね。

山田 非常に鋭いご指摘で、環境・社会活動に携わっている我々自身の頭の中も、実はまだ「トップステートメント」のような段階なのだろうと思いました。昨年のステークホルダー・ダイアログで皆様からさまざまなご指摘をいただき、巻頭や特集ページでは読み手となる生活者の方たちをより強く意識し、伝わりやすいよう努力しましたが、そうした姿勢がまだ身につけていないのだと思います。だから「トップステートメント」のようなページになると、以前のままを引きずってしまう。

黒坂 来年の報告書作成に



おける重要な挑戦課題が見えたのではないのでしょうか。その他、本報告書あるいは新日鉄の環境・社会に関する取組みそのものに関して、要望することはありますか。

大塚 国際海洋研究所(IOI)の一員として、私は、「海の森づくり」プロジェクトに大変興味を覚えました。「森は海の恋人」と言って、気仙沼の漁師さんたちが山に広葉樹の森づくりを始めて以来、今年で22年、やせていた牡蠣が大きくなり、しばらく姿をみかけなかったウナギが戻って来たそうです。近年、

沿岸域の漁獲量が激減しているのは、山から河を伝って供給される自然の栄養素がダムなどで断ち切れ、海が栄養不足になっているためであるということが、理論的にも証明されてきました。山で土の中のバクテリアが広葉樹の木の葉を分解し、土の中の鉄に作用して水に溶解、海中の植物プランクトンの栄養になるフルボ酸鉄をつくる、ということです。「海の森づくり」は生物多様性に貢献し、日本の漁業を活性化し、問題になっている食糧自給率にも貢献するはずですが、ただ、漁師さんにお話を伺うと、新日鉄の装置は大がかりなので、もう少し、小さい規模で使えるものができるといい、ということです。さらなる工夫を望みます。

河西 私が子どものころ、鉄はリサイクル云々などという以前に、どこの町にもクズ鉄業者がいて回収に来ていました。その当時、鉄製品は生活に密着し、鉄鋼業の顔が見えていたように思います。今は、最先端技術で生まれた鉄鋼製品など、さらに広く暮らしの土台を支える製品を生み出しているながら、現代生活の中ではあまり意識にのぼりません。生活者、特に女性たちにもっと企業としての顔が見えるアピールが必要だと思います。最先端技術と対峙させての、循環資源として鉄鉱石から製品になり錆びて土に戻る素材としての魅力や、また、昔ながらの手作りで鉄製品を作り続けている人などにも焦点を当て、取り上げていくことも積極的にしていって欲しいなと思います。

吉原 循環型社会に向けての取組みという点では、新日鉄の資源リサイクル率の98%という高さは誇れ



るレベルだと思いました。それだけでなく、製鉄プロセスを利用して、廃プラスチックや廃タイヤなど他産業で発生する副産物の再資源化まで取り組んでいるというのは、もっと知られていいことだと思います。ただし、最終処分量の2%という比率は小さいのですが、絶対量としては27万トンという大きな数字ですので、さらに削減に向けて努力を継続していただきたいと思いました。

国際競争が厳しくなる中で、日本の基幹産業の意義を見出す

能勢 今日お話しいただいた中で、「トップステートメント」で新日鉄の理念を語ってほしいというご指摘には大反省です。それからもう1つ、自らのことではなく、鉄そのものや社会を語るという発想は必ずしも我々自身が持っていたものではありませんが、去年のダイアログでのお話しを受けてやってみたところ、我々はあくまで鉄の会社だし、鉄を語ることが自らを語ることにもつながるということに気づきました。

黒坂 大人が学び直すだけでなく、子ども向けに使えるほどの報告書に仕上がったと思います。気になるのは「鉄は文明の主演」という表現です。「鉄は文明の基幹」の方が適切ではないのでしょうか。

大塚 一般の生活者の視点を忘れず、わかりやすい言葉に咀嚼して語るという姿勢は今後も保ち続けてほしいですね。

北澤 来年版では何をどのように語るか、また試行錯誤の1年が始まります。

吉原 個人的な考えですが、高い技術力に加えていのちやくらしといったソフト面を、付加価値としてどう製品に加えていったかを出すのも素晴らしいように思います。先ごろ新聞で、中国の鉄の生産量が増えて余剰分を日本に売ってくるのではないかと、日本は技術力だけでは太刀打ちできなくなるのではないかとといった警鐘が鳴らされていました。日本国内は人口減少の時代に入って今後は需要が減っていくわけですね。その中で日本の基幹産業が、国際競争を前提としてどう生き延びていくのか。いのちとくらしを新たな価値観に加えて勝っていくんだ、というところが出せたら良いように思います。

河西 今年の2月頃、計測器が使えないほど高温になる溶鉱炉の中の温度変化やどのような現象が起きているのかを知るため、数学的な解析方法を使う研究に「新日鉄特命チーム」が取り組んでいるという記事を読んでわくわくしました。いのちに結びついた

鉄という素材から、最先端の技術開発までを手がけている企業というのに魅力を感じます

大塚 社会の価値観の変化と、技術開発の流れを結びつけて語れたら面白いですね。それが今、環境保全のための技術に行き着いているわけです。

黒坂 今急速に成長中で、環境配慮の技術対策を早急に導入すべき中国やインド等の参考になるように、最先端技術に至るまでの日本の製鉄150年史が描かれる来年の報告書も期待しております。長期的には、今年開催の生物多様性条約COP10愛知・名古屋会議を契機にして、“鉄”という多面的な可能性を秘める素材を、人間活動の基幹役だけでなく、地球の生命系の流れを確保し未来に繋げるという21世紀型の基幹役の新事業を切り拓き、先導していただけないでしょうか。

山田 今回もまた貴重な意見をいただき、ありがとうございました。



国際海洋研究所 (IOI)
日本支部 事務局長

大塚 万紗子氏

聖心女子大卒業後、コロンビア大学修士課程修了(比較教育学)、シンクタンク研究員などを経て、1987年に株式会社インターコムを設立。1999年より国際海洋研究所 (IOI) 日本支部事務局長。また科学技術・学術審議会の海洋開発分科会臨時委員も務める。



桂川・相模川流域協議会
代表幹事 環境カウンセラー

河西 悦子氏

静岡大学教育学部美術科卒業。静岡市立須津中学校教諭、静岡大学教育学部美術科技術助手、都留文科大学非常勤講師などを経て、結婚後は主婦業と市民活動・制作活動に取り組む。桂川・相模川流域協議会代表幹事。また大月森づくり会の代表も務める。



東京財団
研究員兼政策プロデューサー

吉原 祥子氏

東京外国語大学卒業(タイ語専攻)。在学中、タイ国立シーナカリンウィロート大学へ国費留学。米レスリー大学大学院(文化間関係論)、米 Institute of International Education バンコク支部を経て、現職に至る。



持続可能な発展のための
日本評議会 (JCSD) 事務局長

黒坂 三和子氏

1970年代に発電所立地の社会・環境アセスメント業務を経験後、ヨーク大学環境学大学院修士修了、エール大学教授の日本人の自然観調査補助、1989年から世界資源研究所 (WRI) 日本責任者、1996年からJCSD事務局業務を兼務し京都COP3会議への協力等、持続可能な発展の実現に努める。